

学位審査報告書

新制
人
106

氏名	(ふりがな) もりた けんじ 森田 健司
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 432 号
学位授与の日付	平成21年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 環境相関研究専攻
(学位論文題目)	
<p>武士道と日本近代思想形成史 — 「公共性」 の日欧比較思想研究にむけて</p>	
論文調査委員	主査 教授 佐伯 啓思 副査 教授 西村 稔 副査 教授 大澤 真幸 副査 教授 笠谷 和比古

氏 名

森 田 健 司

(論文内容の要旨)

本博士学位申請論文は、日欧の比較思想研究の観点から、日本の武士道の意義を論じるものである。つまり、武士道に対する申請者の関心は、歴史的、日本思想史的なものではなく、あくまで、西欧近代との比較における、日本近代の価値形成という視点からのものである。西欧思想においては、とりわけ近代社会の成立において、民主主義的な政治を支える「公共性」の形成・変容が指摘される。そこでは、「公」と「私」の領域的な区別がなされ、「私」の領域とは区別された、「公」の領域における共通の価値規範や討論可能性が指摘される。

しかし、一方で日本思想の文脈においては、近代社会と公共性のかかわり、あるいは「公」と「私」の分離というテーマは積極的には論じられず、むしろ、日本思想における「公共性」の形成の欠如という指摘がしばしばなされる。本論文は、西欧思想との比較研究の観点にたち、日本における近代性の契機、とりわけ近代的な「公共性」へとつながる契機を近世日本思想の中に見出そうとするものであり、特に「武士道」をささえた精神的価値に申請者は着目する。

各章ごとの内容要旨は次の通りである。

序言においては、本論文の意図と方法が簡潔に述べられる。「近代」という価値の形成が決して過去の思想の否定と断絶によってもたらされるのではなく、過去の思想の継承・変形によってなされることを申請者は強調し、その観点から、武士道を位置づけることを本論文の目的とする。

第一章においては、思想的な観点からみた場合、「近代」の意味を、「公共性」の形成として理解できることが述べられ、そのことの含意が、ルソー、アレント、ハーバーマスなどに依拠しつつ明らかにされる。西欧近代の「公共性」が、「公」と「私」の領域的な区別を伴っているだけではなく、「公」領域の背後に前提とされた「超越的価値」が「公共性」に対して実質的な価値規範を提供していることが強調される。したがって、いかなる「超越的価値」のもとに価値規範が形成されるかが、当該社会の「公共性」および「近代性」を理解する基本的な要件となってくる、と申請者は主張する。

第二章においては、西欧近代思想の源泉を(1)古代ギリシア哲学、(2)中世キリスト教神学、(3)宗教改革思想、の三つの観点において俯瞰し、そこから、申請者の方法論的な図式が取り出される。この方法論的図式を申請者は「視線類型」と名付けているが、(1)古代ギリシア哲学の主たる「視線」を、外的世界への観照、(2)アウグスティヌス的な中世キリスト教神学的主たる「視線」を、自己への内省、(3)宗教改革思想の主たる「視線」を、超越的価値への志向と捉え、とりわけ、(3)に見られる超越的価値への志向が「近代」に対して果たす意義が強調される。さらにこの章では、上の「視線類型」が日本の精神史にも適用できるとの立場から、仏教における、律宗、天台本覚思想、浄土教の区別とその意味が論じられる。

第三章においては、日本における「公」と「私」の観念形成とその意味が論じられる。西欧のような「公」と「私」の整然とした対立は日本にはなく、「公」と「私」は、重層構造的な相対的關係になっていることが、溝口雄三や田原嗣郎らの研究を参照しつつ整理される。その上で、申請者は、赤穂事件を素材とし、荻生徂徠の赤穂事件への論説等の検討を通して、この事件において、「公」と「私」の重層構造という日本的「公」「私」観念が破綻していることを指摘する。

第四章においては、改めて、武士道概念が検討される。士道と武士道の区別に留意した上で、申請者は、武士道を、ひろく武士階級に特有の行動規範と理解し、その意味と変遷を、戦国武士道の典型である『甲陽軍鑑』、さらには、江戸時代の『葉隠』、『武道初心集』等を手掛かりに論じる。武士道観念の中心には、「死への覚悟」と「恥と名誉の感覚」があるが、申請者は、ここで、『葉隠』に代表される私的心情にもとづく主君への「忠」に対して、『武道初心集』に示される、私情を排して「義」を前提とした「死の覚悟」を武士道の典型として評価する。

第五章においては、大塩中斎、河井継之助、山田方谷、横井小楠が取り上げられ、彼らの思想と「近代」との関係が考察される。申請者は、陽明学に影響を受けた大塩の思想に、私的領域を超出した超越的価値への志向を見出し、河井継之助に、その実践をみる。さらに横井小楠において、超越的価値としての「天」が「公共の道」を成立せしめる、という論理が提示されている、と主張する。

こうして、中国の陽明学の影響を受けとめたある種の武士道（陽明学的武士道）の思想において、「私」と「公」の峻別が示されるが、その場合に、「私」を排した「公」観念の成立において、超越的価値としての「天」や、そこから派生する「義」の観念が決定的な役割を果たした点に申請者は着目する。そして、ここに、日本の「近代」を生み出す精神的契機が存在する、と申請者は述べる。

以上述べたように、本論文は、日本の武士道の展開をたどることによって、陽明学の影響を受けた武士道のなかに、「私」とは区別された「公」という観念の形成を見出し、そこに日本の近代的な「公共性」の萌芽を見ようとするものである。

氏 名	森 田 健 司
-----	---------

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、日欧比較思想研究の立場から、「公共性」の形成と日本の武士道との関係を論じたものである。申請者の立場は、従来の日本思想史研究や歴史研究と関連はするものの、それらとは異なっており、独自の方法と視角をもつものである。また、日本の精神史研究においても、従来あまり学問的対象とはされてこなかった武士道の観念を取り上げ、それを、日本における「近代性」の契機として理解する、という独創的な主張を行っている。本論文の特徴を次に述べておきたい。

第一に、本論文は、武士道の理解を主眼としているが、それは、あくまで、「近代」の形成にかかわる日本と西欧の比較思想という大きな問題関心のもとにおかれていることが注目される。「近代」形成についての日本と西欧比較というテーマは、マックス・ウェーバーの宗教社会学や、それを受け継いだロバート・ベラーの研究がよく知られているが、申請者の研究はそれらとはスタンスを少し異にし、日本の近代に対して、武士道がもった意味を、公共性の形成という観点から論じるものである。

第二に、その比較思想研究を行う際に、申請者は、古代ギリシア哲学、中世キリスト教神学、宗教改革思想などを俯瞰した上で、「観照」「内省」「超越的価値」という、思想の展開を理解するためのひとつの解釈図式を抽出し、それを日本思想にも適用することで、日本思想と西欧思想の両者の構造的な比較を可能としている。この申請者の図式化には、いく分かの恣意性が残り、批判的検討の余地はあるにせよ、この意欲的な取り組みによって、思想的な展開が統一された形で了解可能となる点は評価しなければならない。言い換えれば、朱子学、陽明学、武士道等が、その個別的な専門研究を超え出たところで、一定の展開様式のもとに理解されることになるのである。

第三に、「近代」という時代精神(価値)を、「公」と「私」の領域的な分離、および、「私」から切り離された「公共性」の形成に求めるという独自の視点から、申請者は、日欧の「公共性」観念の比較を行っている。従来、西欧では、「私」と「公」の領域的分離が明快であるのにたいして、日本では、「公」が「私」を抑圧する傾向が強く、「公」の中に「私」が吸収される傾向が強い、とされてきた。溝口雄三や田原嗣郎の研究がその意味での日本的「公」「私」構造を論理化してきた。申請者は、彼らの研究を踏まえた上で、江戸幕藩体制においては、この構造が矛盾をはらむ点に着目し、赤穂浪士事件を手掛かりに、「公」「私」の背後に「天」のような超越的な視点が想定されていることを強調する。この超越的視点は、たとえば陽明学の影響を受けた大塩中斎の思想に明確に表現されている点に申請者は注目し、従来の日本型「公」「私」観とは異なった「公」の意識を提示している。

これはまた、荻生徂徠の中に、西欧的近代にも似た「公」と「私」の領域的分離を見出す丸山真男の解釈とも異なっている。申請者は、徂徠が「公」「私」の背後に「義」を想定していたことに着目し、そこに後の陽明学へとつながる超越的契機を見出す、という独自の解釈を提示している。

第四に、武士道を、ひとつの規範の体系をもった思想とみなし、「公」「私」の意識、および「義」という観念との関連で正面から包括的に取り上げた点は、本論文の重要な意義である。武士道については、現在でも、一般読者の関心が高まっており、解説書も多数出版されているが、それを包括的かつ思想的に理解しようという試みは多くない。その中で、かつての相良亨による日本思想の一環としての武士道研究や、近年の笠谷和比古による歴史的研究などを踏まえて、申請者は、武士道についても独自の視点を打ち出している。『甲陽軍鑑』、『葉隠』、『武道初心集』などの意義を申請者独自の視点から明らかにするとともに、大塩中斎や河井継之助を取り上げることで、陽明学と武士道という従来異質とみなされてきた思想を結びつけ、そこに「陽明学的武士道」という独自の範疇を設定し、その意義を解明した点は高く評価できる。

このように、本論文は、通常の専門分野としての日本思想史研究の一部とみなされるべきものではなく、あくまで、日欧の「近代性」と「公共性」の形成における比較思想研究をめざすものであり、この雄大な構想の中に、近世日本思想としての武士道を位置づけるという点で顕著な独自性をもつものである。このテーマは、マックス・ウェーバーに始まる比較宗教社会学や、また、丸山真男の日本思想史研究とも関連をもっており、特に、丸山の見方に対する暗黙の批判ともなっている。

さらに、本論文は、武士道の理解、および、朱子学、陽明学、武士道の関連についても独自の見解を提示し、いくぶん荒削りながら、きわめて論争的かつ刺激的である。武士道の見地からして『葉隠』を異端的なものともみなし、大塩中斎や河井継之助を高く評価するという独特の見解もその一例である。

本論文には、論理構築に多少の難点はあるものの、問題意識のスケールの大きさ、議論の独自性において際立っており、武士道をみる独特の見方についての申請者の確信が本論文を刺激的で説得力のあるものとしている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成20年11月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認める。